
信長のキセキ

如月二口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信長のキセキ

【コード】

N9630F

【作者名】

如月二口

【あらすじ】

かの有名な織田信長の「天下布武」までの道を分かり易く書いてみました。

織田家を中心にした流れが分かります。

そんな堅苦しいものではありません。むしろ軽いです。スツカスカです。

基本的には異説、新説を入れるとこんがらがるので定説をなぞる形で行こうかと思えます。

しかし小さな出来事、人間関係、そして人の心は史実というものに出てこないので創作になっています。あくまでも一大イベントだけが史実通りです

プロローグ（前書き）

初投稿なのでちょっと心配ですがよろしくお願ひします

プロローグ

時は戦国 1447年

事の発端はある家の家督の争いから始まった…。

しだいに傷口が広がりやがて全国的な内乱へと発展し後に

「応仁の乱」と呼ばれる。これにより幕府が以前の統治力を失い守護大名や守護代、はたまたその部下が

「將軍様の為に世界を平和にする」という建て前のもとに力を蓄え、乗っ取る

「下克上」の時代 そんな中、誰よりも

「目立ちたい」という意志の強かった織田信長

彼はこの極めて単純な動機から守護代を蹴落として台頭

後の世界に多大な影響を及ぼしたのだ

「バカと天才は紙一重」

果たして、彼がしでかした行為は愚行なのか…あるいは改革なのか…

それは後の社会が決めること

この時代の誰よりも人生を楽しんだ彼の四十九年間の始まりは、ある小さな国からであった…

1話 自由人・吉法師と苦勞人・政秀

西曆1546年 尾張国（現在の愛知県）

城下の南蛮商館で数々の南蛮物を眺め驚嘆している少年がいた。名は吉法師。その少年は髪を茶筌髷に結び、片袖を出した湯帷子と半袴を身に着け、腰にはひょうたんやら火打ち袋やらがぶらさがっていてどう見ても武人には見えない

「おい！！これはなんだ？」

「ソレハ、鉄砲トイツテ、火薬ノチカラで弾ヲ」

「若あ！！今日という大事な日に何をしているのですか！！」

この老人の名は平手政秀。2番家老で彼の教育係である。

「やれやれ：爺よ、俺はもう子どもじゃないんだ。今日で晴れて元服：。いつものその子ども扱い、改めてもらうぞ」

元服とは今で言う成人。人によつて年は異なるが16歳前後が主流である。ちなみに彼は12歳で本日、元服の儀が開かれる。

「その元服のために私が町中を探し回つたのではないですか！！それに私は若を子ども扱いしているわけではなく信秀さまのご嫡男が一人で出かけては危ないから申しているのです。三河の竹千代さまも家臣の裏切りに遭い、この尾張へと連れて来られました様に若の身にも何が起ころるか分かつ」

「そう言えば竹千代に話したい事があつたんだ。ちよっくら行つて来るわ」

「と自覚を持つ：わ、若！？なりません！！もうすぐ式が始まりますぞ！！」

「ばッ：やめ」

平手政秀は吉法師の奥襟を掴み、強引に古渡城へと向かうのであつた：。

ちなみに竹千代とは三河出身の豪族、松平家の跡取りで現在は今川家に降っている。人質として今川家の本拠地の駿河へ護送中、家臣に裏切られ、織田家の人質となっている。敵地である尾張で唯一分け隔てなく接していたのが吉法師である。

この若い二人の交友が同盟に変わるのはまだ先のお話……。

1話〱自由人・吉法師と苦勞人・政秀〱（後書き）

気が向いたら誤字、脱字等、教えてください

2話 親父 登・場

「それでは、信秀様の嫡男、前・吉法師様の元服を祝し、乾杯」

「乾杯」

古渡城にて元服の儀が滞りなく終わり、主役そっちのけので飲み会が始まった。

「まったく…元服したにもかかわらず変わり映えしないのう」男は40半ばだろうか、刀を携え、着物を着ている所を見ると武士なんだろうが、顎髭が濃くもみあげと合流し、またその髭の長さも尋常ではなく鎖骨にまでとどこうかといった長さであり、髪は前髪こそあげてはいるが、剃り上げたりせず、いわゆる「ちょんまげ」にはしておらず敢えて言うならばオールバックに近い。その姿は武士とは程遠いものであった。

「虫じゃねえんだ。そんな急に変わるワケねえだろ」

「ガツハツハ！！確かにおぬしは虫ではないのう。間違いなくワシの子じゃ」

このチヨイワル髭面のおやじは吉法師の父親、織田信秀であった。彼は尾張でも名のある将で織田家の勢力を尾張半国こ尾張大半まで広げ、他国へも勢力を伸ばしている。おそらく尾張国内で一番勢いがある人物である

「ケツ！！」

「二人してなにやってんですか…」

吉法師の実弟、勘十郎である。我の強い吉法師と違って教養があり家中のものから期待されている。

「兄上がぱっぱらばーだから家臣が不安になり、信頼が得られぬのではないですか」

「おい勘十郎！！今のは聞き捨てならねーな」弟にナメられっぱなしでは兄としてのプライドが傷ついたのであるう

「まるで俺がぱっぱらばーみたいじゃねえか！！」

「ええ、今そう言ったのです」

やはり彼はぱっぱらぱらであった。

「ガツハツハ！吉法師よ、なにはともあれ今日から一人前じゃ、自分の後始末ぐらいは出来るようになる」と

まるで以前はそうではないような言い方である。

「おう！それより俺の名前はどんなのだ？」

一般的に元服すると名を改めるのだ。ちなみに幼少時の名前を幼名という

「んお？ああ、織田三郎信長…じゃ」

「よし、親父、勘十郎、爺（平手）もう若や兄上と呼ぶな！！今日から俺は信長だ！！」

信長は言い放つと古渡城を飛び出していった。

「若あ！！まだ城外へ出てはなりませんぞ！！」

「まったく…兄上は…」

「ガツハツハ！！やはりまぎれもなくワシの子・吉法師じゃな！！」

2話 親父 登・場 (後書き)

まだ話が出来上がってないのでスローペースですが気長にお待ち
ください

3話〜弟の憂い〜（前書き）

親父に続いて弟も登場です

あと兄弟争いのキーマンである柴田勝家も…

3話 弟の憂い

「よろしいのでしょうか、父上」

「なにがじゃ？」

「兄上の振る舞いですよ。あのままでは家督を譲った後、父上に従っている家中の者がそのまま兄上に従うとは限りません」

「このとき勘十郎は自らが織田家が割れる原因を作ることはまだ知らなかった。」

「お？そうじゃのう。確かにワシが死んだ後、織田家は内乱になるかもしれない」

「そうならないためにも！…兄上にしっかりするよう諫めるべきではないのですか」

「勘十郎は生まれて初めて声を荒げた。なれない事をしたせいか、顔が赤い。」

「…。お主ほど織田家を心配する者が信長の弟なら、この家をお主に譲れるのう」

「信秀はケラケラと笑いながらそう漏らした。」

「ッ！！ 平手殿も、しっかりしてくださいね。それでは失礼します」

「勘十郎は信長と同様に早足で帰ってしまった。」

「まったく兄弟そろって途中で抜けるとは…まあよい、平手！！今日日は飲むぞー！！」「はっ！！潰れるまでお供いたしますぞー！！」

「権六、父上や兄上は一体なにを考えているのか俺には理解できない…」
「信秀様や信長様とはご家族ではないですか…家族なら腹割って話し合うのが一番だと思いますよ」

権六：勘十郎の補佐役。権六は通称で正式な名は柴田勝家。戦での働きは織田家の中でもトップクラスだが、いかんせん頭が回らないせいか、アドバイスには重みを感じられない

「権六よ、我らは家族であると同時に主と従の関係なのだ…腹割って話す機会などないのだ…」

「今は信行様は家来ではなくただの子どもではないですか!…」

権六曰わく、元服を済ましていない者はまだ家来とはいえない。と言つことである。

まあ少し失礼な気もするが

「子どもならなおさらこれからの織田家を語る資格などない…」

(果たして兄上は本当に家督を継ぐ気があるのか…?この際俺がいや、何を考えているのだ…家中が混乱しては元も子もない)

一方信長は…

「」
「」
「」

勘十郎の心配をよそに上機嫌に友人の家へと向かっていた。

「あっ、お前らはもう帰って良いぞ」

「はっ!!!失礼します」

信長は小姓達（付き人）にそう言って友人の家の前に立った。

ちなみに小姓は顔立ちの整った十代の少年が務め、護衛やスケジュール管理、はたまた戦中は夜の相手なども行う。この時点ではただが後の織田家重鎮・丹羽長秀や有名なところを挙げると森蘭丸などがこの職に就いた。

「さて、おじやましまーす」

「ぬお？わ、若！？今日は待ちに待った元服の日ツスよ！？まさか忘れて」

「それならもう終わったさ。少し時間ができたから市にでも行こうと思っとな」

確かに元服はもう済んでいるが、だからといって抜け出しを許される状況ではなかった。

「別に良いですけど、買うものは決まってるんですか？目的もナシにフラフラするのはイヤですよ？」

「目的ならあるさ、フラフラするのが目的だ」
…。

「ま、まあ丁度俺も市に行こうかと思ってたところでした…」
突っ込まないでいいのか…

3話「弟の憂い」(後書き)

弟・信行の幼名が分からなかったので通称の勘十郎を使用しました

4話「サル顔との遭遇」

行くあてもなく歩き続ける信長と犬千代。

「ホントに目的もなくブラブラするだけですか？」

「さっきも言ったがブラブラするのが目的だ」

とても偉そうに上体をそらす信長。

「じゃあどこをブラブラするんですか？」

「ココでブラブラしてるじゃないか」

キレてもいいと思うぞ…犬千代。

「では若はどこの市に行くつもりなんですか？」

キレなくていいのか？

「どの位置に行くかは俺の気分と足次第だな」

キレるよ!!めんどくせえよ信長…

「では港へ行きましょう。外来品も出回っているかも知れません」

「いや、でも俺の足がこつちへ…」

「こつちですぞ若ぁ!!」

「お、おお…」

ナイス犬千代!!信長がしんなりしてるぞ!!

移動中…

スタコラサッサ

いや、あの…すみませんでした…

「いやあそれにしてもいつも栄えてますねえ、この港は」

「無論だ。爺いの港だからな」

訳が分からないので補足をすると、信長の祖父、先代の織田家当主は尾張にあるこの港に目をつけた。

投資を繰り返した結果、信長の父・信秀の代で実を結び、爆発的な経済成長が起きた…

今では尾張の中心部、清洲の町にも活気では引けをとらない市場にまで成長しているのだ。

「信秀様の連戦連勝は、この港の経済力があつたからでもありますしね」

犬千代の家は小さいながら自分の領地を持っている。

なので戦をするにもただだつて行くだけでなく、莫大な資金が必要なのが身に染みてわかっているのだ。

そのせいか、ちょっとケチでもある…

「さあさあ、針のゲリラ販売始めるよー!!」

どこからか元気のいい声が聞こえてくる…

声の正体を確認すると、耳のデカイ少年が麻を敷いて大小の針を並べていた。

「見るよ犬、ガキが針売ってるよ」

「確かに…妙ですね。10にも満たない子どもが1人で行商とは…
つばやく2人を尻目にチラホラ人が集まってきた…」

「三河武士の鎧から頂戴したありがたい鉄は尾張の鉄とは強度が違う!!」

「鍛えた針は尾張の針の1・5倍の耐久力を保証!!」

「なのに値段は尾張の針の7割!!お得度は2倍!!」

「更に今回、購入と同時に併にお渡しする保証書を次回持って来れば、壊れた針を無料で新品と取り替えるサービスまでつけちゃおう!!」

針…
次々と売り文句を叫ぶ度に、ポンポンと面白いように売れていく

「口が上手いな、アイツ…」

「ええ、それにただ叫んでる訳ではないみたいです。あれ、見ててください」

「コレください」

「お目が高い!!、お母さん、さてはプロですね?お子様に練習用

もどつですか？長い針の半額でお売りしますよ？」

「まあ…じゃあ短い針も3本ください」

「ありがとうございます！！お客様方が短い針を卒業したら、また来て下さいね。その時には昔の針と半額で長い針と交換しましょう
！！」

「あら、わるいわねえ。ではまた…」

「ありがとうございます！！」

「あのように、ただ売るだけでなく、何故、求めているかを読み取って商売してるんです」

「ほう…大したガキだな」

そうこうしているうちに持っていた針が完売。少年は早々に荷物をまとめて、帰ろうとしていた。

「おい、ちょっといいか？」

信長は興味本位で少年に訪ねる。

「すみません、もう針は…これは、織田の世継ぎ様…」

「信長だ。今日は空いているか？話しがしたい」

「えっと…明日の仕込みがあって終われば時間とれますが多分夕方になると思います」

すんなりと言っているが大変な事である。

目上の人物である領主の息子の用件を後にまわしているのだから…

少々驚いたが別に憤怒の感情はない様子の信長。

「なら仕事をしながらでいい…。もちろん仕事の妨げにならないようにする」

「わかりました。ではこちらへ」

「待て、こっちに馬がある。乗っけて行くからついて来い」

(若…絶対馬パクる気だ…)

当時、日本の馬は小柄で速さよりも力強い走りが特徴的である。

なので一般人のダッシュとさほど変わらないが鎧武者を乗せても

平気な顔で走る事ができる。

体力が売りの日本の馬は長距離移動や荷物運搬に向いているだ。

したがってちょっとそこまでの散歩に馬を連れて来る訳がないのだ…

(うーん…若が馬を買うのは有り得ないしなあ……。ああ…頭が痛い…)

つづく…

4話「サル顔との遭遇」(後書き)

そういえば史実ではこの頃は家康は捕虜になってないそうですが…

この作品では捕虜になってたって事にします!!

では^^

5話 サル顔との会合

「オヤジい！！馬借りるぞ！！」

「また来やがったな大吉坊主。何匹目だと思ってるんだ」

「信長だ。そつちこそ何回名前間違えるんだよ！！常連の名前くらい覚える！！」

「ハンツ！！こつちは承知の上で呼んでんだ。客でもねえ奴にまともな接客なんか出来るか！！」

「俺だつて承知の上で馬パクッてんだ！！5匹借りて、その内3匹はちゃんと返したじゃねえか！！」

「それがおかしいんだよ！！なんで貸した馬が返って来ねえ！？」

「どうしたんだい大きな声出して…あら織田の大吉ちゃん」

「すみね！！馬貸してくれ！！」

「ええいいわよ。気をつけていつてらっしゃい」

「人の女房を名前で呼ぶな！！母ちゃんもなんで貸しちゃおうのさ！

「！」

「あら、良いじゃないの。どうせ殿様にあげるなら一緒じゃない」

「あーもう…しゃーない…今回だけだか…ら…いねえ」

「よし、お前馬乗れるか？」

「いえ…なんせ百姓の出ですし」

この時代、武士の子は武士の教育を受け、出家を除いては親の業を継ぐのが当たり前で、百姓、商人も子は親の仕事を受け継ぐものであった。従って騎乗を許される上流武士以外は馬術など身に付けていない。

「なら2匹でいいか…おいワンコ、こいつ乗つけてやれ」

「犬千代です！」

「似たようなもんだろ…犬って呼ぶのはなんか変な感じがするんだよな…ワンコの方がしっくり来るし」

「若ー？遅いですよー？」

百メートル程離れた所から犬千代が呼んでいた…サル顔の少年を馬場に残して…

「ッ！…しゃーねえ…乗りな！…」

「あ
」

ヒヨイと少年を馬に乗せる信長。そして犬千代を追い、走り出す。

「「…。」」

蹄の音だけが辺りに漂う

「信長…だ。」

沈黙を破り唐突に名乗る信長…。

「…。日吉と申します」

多少驚いたもののしつかりと名乗った日吉という名の少年。

「さつき百姓の出といったな…なぜ行商なぞ…」

この時代、世襲制がとられていて家業を継ぐのが原則であった。なので日吉は世間からズレた生き方をしている。

「この時勢じゃ百姓は生活が厳しいんです。金を溜めて、いつかは

武士になりてえんで…武士なら戦の犠牲者にならねえ。父ちゃんも死なずにすんだんだ…」

思ったよりも深い事情で踏み込んで良かったのか考え込む信長…。

「報いよう。いずれな…」

ようやく絞り出したのは、かすれきつた声だった。

「気になんてしてやいませんよ。ただ、生き残りたいだけです。」

気丈に笑う日吉を見て、心を締めつけられる思いだった…。

6話 サル顔との分岐

「着きましたここです」

「ここは…」

「蜂須賀家の本拠地じゃねえか…」

「ええ、小六さまとは古いつき合いで　「貴様！！謀つたな！！」

「まで、犬…」

この時点では蜂須賀家は隣国の斎藤道三に味方している。いわば敵国に足を踏み入れてしまったのである…しかもお供は犬千代一人…

「いや！！待ちません。ここで斬り捨てる！！」

犬千代は刀を抜き斬りかかろうとしたその時

「おいおいおい、うちのシマで勝手してんじゃねえよ」

「んだと」…「ラ……」

デカイ。巨躯の犬千代より頭ひとつ分出ている。

「だから待てと言ったろうに…蜂須賀あ、清洲城以来だな」

「おおぅ…信秀さんとこの小倅か…相変わらずうつつけてんな。どうしたこんな端っこまで来て…」

出会い頭の御曹司になんと素直な一言。どうやら面識があるようだが…フランク過ぎる感は否めない。

「若、知り合いなんですか？」

「ああ、美濃との同盟の話が持ち上がった時、関係者が清洲城に集まってな…まあ結局交渉は難航、今はゆるい停戦状態みたいなもんだ。俺が見た限りその会議で一番まともに理解出来たのがコイツ」

ハチスカマサカツ

蜂須賀正勝通称小六は織田家の治める尾張と斎藤家が治める美濃の国境に居を構える豪族。その辺りは木曾川が流れていて、水運により財を得ている。後に豊臣秀吉の重臣になり軍事、外交に秀でた将として活躍する。こういった小領主には情勢を見極める眼が必要とされる。小六は正に優秀な小領主である。

「美濃と…同盟…？」

「なんでい、知らんでこんな国境付近をウロチヨロしてたんかいア
ンタもうつけよのう」

「…ぐう、若と一緒にされるとは…なんたるくつじよグフツ!!」
「なに失礼な事言おうとしてんだバカ…むしろ今回はオレちゃんとしてたからね!？」

『今回は』とつけるあたりが若君として失格ではあるまいか…

「お待たせしました。では、参りましょうか」

いつのまにか消えていつのまにか戻ってきた日吉はフォーマルな恰好をしていた。

「よし、行くか…どこへ?？」

それもそつだ。信長達はつきり家でまったりするのかと想っていただろう。

「流通網と情勢は一日で激変するので新しい情勢を得るために屋敷で情報交換するんです。さあ行きましょう」

すごく偉そうな日吉。

「日吉い!!今回も頼んだぞ!!」

笑顔で送り出す小六。いったい何を頼んだのだろうか…。

「さあ、着きました。」

「「…おう。」

目の前にはそこそこの豪邸。正に圧巻である。

「さあ入りましょう」

「え…おい!!」

何を血迷ったか門をくぐるなり縁側へ向かう日吉。

「おう!! やつと来たかボウズ!! じゃ、始めるか!! 流通網と情勢は1日で激変する!! 情報は常に最新の物をな!!」

ごく最近、どこかで聞いたようなセリフを吐く館の主らしき人物。

「い、家宗さん、今日は客人が来てまして…」

「いやっ、俺た　「そうか!! よく来た客人よ!! しかし気心の知れぬ者に会議参加は認められん!! 客間を用意しよう…おい吉乃!! 案内して差し上げなさい」

帰るタイミングを失った2人…。館の主らしき人物と日吉は部屋へ入って行った…。入れ替わり出て来たのは若い女。

「娘の吉乃でございます。おさる…日吉さんの友人だそうです…どうぞ中へ…。」

「いや、俺たちはもう帰るヴゴツ！！」

「はじめまして吉乃さん！！自分、信長っていいます！！！」

「分かりやす過ぎるぞ信長…。」

7話「吉乃は俺のヨメ」(前書き)

お久しぶりの更新です。

愛読者は皆無な気がするので相変わらず超不定期&超スローペースで行きます。

7話 吉乃は俺のヨメ

玄関へ回り客間へ通された2人。

『若っ!! 帰らなくていいんですか!?!?』

『内は小声で話してます。』

『バツカこんな可愛い娘いるのに帰るなんてもったいないねえだろ!?!?』

『…は? あの娘のどこが可愛いんですか』

『おまつ かわいいーだろーが!?!?』

『内は小声ではありません。』

『どうしました? 奥へどうぞー?』

廊下の曲がり角で振り返る吉乃。

『い、今行きまーす!?!?』

信長よ…声が裏返っちゃってるぞ。

『とにかく次会う約束こぎつけるまで帰らねえからな！！』

『はあ…わかりました。その辺うろついてますんで終わる頃に戻ってきます』 「可愛い」に引っかかったままの犬千代。まあ好みなんで人それぞれ…気にする必要ないぞ、信長…。

「あまり広い部屋ではありませんがゆっくりしていただいて下さい」

客間に通された信長。ちょっと挙動不審気味である。

「あ、あの…ツレが出てしまっちゃってやることないんで…よ、よかったです話し相手になってもらえませんかッ」

元服したといってもやはり12歳の少年。信長もつぶな一面が残ってたりする。

「ええ、私でよかったです」

「あの広間に集まっていたのはどんな人達なんですか？共通点が見当たらないのですが…」

「ええ、あの方達は職業も出身もバラバラ…だからこそ集まるのです」

「だからこそ？」

「彼らは5日に1回は集まって情報を交換してるんです。そして次にどうするべきかを各々考える為に色々な種類の情報が必要なのです。」

つまり様々な場所で様々な業界の情報を把握するために様々な人々が集まっているらしい。

「いや、それはおかしくないですか？商人は商人同士で情報を共有出来ればそれで充分ではないですか」

「ふふっ…そう思いますか？」

静かに笑って吉乃はそつと戸を開けた。すると広間に集まった人々の会話が流れて来た。

「三河じゃ今米が足らんらしい。なんでも今川義元が戦の準備で増税だとか…」

「へえ、じゃあ尾張の米が買い時じゃねえか」

「へへ、戦か：鎧と槍を新調しなきゃな、矢弾や木材を手みやげにあいさつでも行こうか」

「東海道は危険かもしれんの：しばらくは美濃で説法でも吐いてるかの」 商人、牢人、僧侶など様々な職業の人々が一つの情報を自分からの目線でそれぞれの対応策を考えているようだ。

「なにも一つの情報にメリットが一つとは限りません。情報は使い方によってはどれだけの領地より力を発揮するものなのです」 信長は姫にするには勿体無い。純粹にそう思った。と同時に、側に置きたい、こんな人とひたすら語りあかしたい、そんなことが頭を駆け巡った。

8話 結婚！？

「結婚してください！！」

それは唐突に彼の口から声と共に飛び出した感情だった。

「あの」

「いや、忘れてください！！嫌ですよね、今日知り合った男にこんな事言われて…」

冒頭からいきなり放り込んだ本人、織田信長自身も自分からでた言葉に動揺している。

「そういう」

「嫌なら嫌って言ってください。ちょっと口が滑ったというか…ああ、なんでこんな事言っちゃったんだろうな」

全くである。セクハラとナンパを足して割ったような発言はいくら若君といっても控えてもらいたい。

「わたし」

「なーに人んちの娘たぶらかしとんのじゃ」

「げっ…生駒！？」

父親登場。信長。ピーンチ！！

「ハツハツハ！残念ながら吉乃の婚約者はもう決めておる。だいたい尾張の大うつけなぞに大事な娘をやれるか、吉乃も嫌がるじゃろ」

「けっ！！ほつとけ…」

「あの…わたし」

「若あゝ終わったみたいですよ」

キング・オブ・KY、犬千代の横やり…いつの間にか帰って来た

「信長さま、お待たせしやした。おらは蜂須賀村に帰りますが、馬はどつしまししょう」

「おお…ああ…その辺に放つとけ、勝手に帰るだろ。帰らなかったら馬屋のオヤジから買い取るから」

うん、セレブだ、ボンボンだ、人間のクズだ。

「おい小倅、そいつはうちの馬屋のじゃあるめーか？」

なにを隠そう、生駒屋敷の大きな財源は馬貸しによるものでその出張所から貸し出した馬なのであった。

「そんな軽々と野に放たれたらたまったもんじゃない。わしから馬屋に戻しておくから置いていきなさい」

なんといい人。生駒の亭主。

「んなら、ここで解散だな。日吉い、楽しかったぜ。」

「いえ、こちらこそありがとうございました。」

「なんかあったら那古野の城に来いよな、きっと若がどうにかしてくれっから!!」

犬千代、完全に人まかせか。

「はい、二人ともお元気で。生駒さんもまた5日後に…」

「うむ、またの」

そしてそれぞれの家路へ着いたのだった。

「吉乃よ、さっきはなんて言いかけてたんだ？」

「うづん、なんでもない!」

子どもの頃から結婚相手が決まっているとはいかにも難儀なものだ。

8話「婚約!?!」(後書き)

しばらく書きためるかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9630f/>

信長のキセキ

2011年12月21日23時49分発行